

実技検査・面接・小論文

第2次試験における学力検査は、多くの場合5教科の一部分について学習達成度を測定するが、それでは測り切れない、又は測定が不適当な学力その他の幅広い能力や人物を評価したい場合に、実技検査・面接・小論文の方法が使われる。これらの比較的新しい方法を採用し、熱心に工夫を加えている大学は少なくない。56年度に国立大学では、実技検査は58学部(17%)、面接は92学部(27%)、小論文は121学部(36%)である(文部省大学課調)。その評価の妥当性・信頼性・公平性を高めるため、実施や評価の方法について、また学内成績にかかわるこれらの方法の効果などについて、研究を進め改善策を開発している大学の状況を述べることにする。

(1) 実技検査

東京芸術大学では、53～56年度の声楽科・ピアノ科入学者(第2次試験は実技検査・面接のみ)について調査し、第2次試験成績1位と入学後専攻実技秀と共通1次試験の総点と数学I得点の4者の間に高い関連性が読み取れるとしている。

教員養成大学・学部の音楽・美術・体育専攻の入試には実技検査が付き物であるが、兵庫教育大学では適性の判定方法、和歌山大学では入学者の追跡調査を行っている。

(2) 面接

医学系の学部等では面接の採用が比較的多い(56年度、国立大学42学部中17学部41%)。このことについては、日本医学教育学会の積極的な研究と応用化の努力がある。

個人面接については、実施方法・評価方法の研究(旭川医科大学・浜松医科大学・佐賀医科大学)があり、複数の面接員の評点平均に大差はない、面接成績と共通1次試験・第2次学力検査・小論文・高校調査書との相関は0.1～0.2程度で低い(旭川医科大学)、面接員のワーク・ショップをあらかじめ行うが、面接の実施が教官の教育関心を増大させる副次効果がある(佐賀医科大学)等の報告がある。実施改善に結びついた例として、佐賀医科大学では56年度から面接を2日間行い、第1日は任意質問、第2日はあらかじめ別室で課題について作業させた後作業に関連する質問をすることとした。

集団面接については、実施方法・評価方法の検討(佐賀医科大学・宮崎医科大学等)、学力検査成績・調査書との比較(宮崎医科大学)等が行われている。

その他兵庫教育大学では、初等教育教員養成課程の推薦入学について、初等教員としての意欲、資質・能力等を見るための面接方法を検討している。

(3) 小論文

医学系の学部等でその採用は比較的多い(56年度、国立大学42学部中16学部38%)。これについてもまた医師の卵の適性・能力を妥当に測ろうとする日本医学教育学会の努力がある。

小論文についての研究には、出題の形式・内容の研究(浜松医科大学・佐賀医科大学)、評価の方法・基準・実態の研究(旭川医科大学・信州大学・浜松医科大学・佐賀医科大学)、調査書・共通1次試験・第2次試験との相関調査(新潟大学)、教官・学生に対する質問紙調査(浜松医科大学等)があり、医師としての適性・能力を判定するのに妥当な方法であることが判明したとの報告(佐賀医科大学)もある。

また、教員養成系学部でも小論文の実施は比較的多く(56年度、国立大学50学部中22学部44%)、将来の教師にふさわしい適性・能力をはかろうとする熱意によるのであろう。出題のあり方・形式・内容や評価の方法・基準の研究(大阪教育大学・兵庫教育大学・宮崎大学)、評点の平均点調査(福島大学)、相関調査の結果共通1次試験・第2次試験とはほとんど相関はなく、別個の側面を測定しているとの報告(滋賀

大学)などがある。

経済学・法学・人文社会学系の学部についても研究が行われており、相関調査(岩手大学・名古屋大学等)の結果、共通1次試験との相関が弱く、小論文の意義は明らか(福島大学)、2次学力検査成績の平均は、小論文の合格者が不合格者を若干上回っていた(横浜国立大学)、演習の指導教官が日ごろ深く接している学生の演習での学力を評価し、これと小論文成績との関係を調査した結果、教官の多くが小論文に肯定的であった(福島大学)等の報告がある。

工学系学部に関しては、学内成績との順位相関を試みたが、少数学生の統計調査より個別学生の事例調査の方が教育指導上の反省材料が得られて有意義だとの見解(信州大学)がある。また、55年以降第2次募集で入学者数を増大すると共に小論文のみを課すこととしたが、入学後の成績評価指数平均が低下したとの報告がある。

大阪外国語大学は、採点のバラツキと成績の相関調査を、琉球大学は、法文学部と教育学部における小論文成績の相関調査を、宇都宮大学と富山大学は一般的な検討を行っている。